

2025 年度日本語教育学会 学会賞 受賞コメント

三輪 聖（岡山大学・准教授）

このたびは栄誉ある賞をいただき、大変光栄に思います。受賞のお知らせをいただいた時は、すぐには事態がのみ込めず、なぜ私に……というのが正直な気持ちでした。私はこれまでドイツと日本での活動を、決して一人で続けてきたわけではありません。志を同じくする多くの仲間たちと共に、日本語教育の実践研究に取り組んできました。そのため、このたびの賞を個人でお受けするわけにはいかず、辞退させていただくことも考えました。しかし、今回の学会賞はこれまで共に活動してきたチームに授与されたのだと思うと、謹んでお受けするべきだと考えるようになりました。お一人お一人お名前を挙げることは控えますが、これまで共に実践および研究活動に取り組んでくださった皆様に、改めて心より感謝申し上げます。



私は長年ドイツで教育活動に携わりましたが、その間、実に多彩な方々とのつながりに恵まれました。その方々と共に積み重ねてきた経験は、何ものにも代えがたいと感じております。特にドイツの大学で日本学を学ぶ学生たち、そして継承語として日本語を学ぶ子どもたちとの出会いは、私の教育者・研究者としての人生を大きく変えてくれました。これまでいかに人を偏った側面からしか見ていなかったか、ということに気づかされたのです。やがてフィールドを超えた視点で教育を考えたくなり、Volkshochschule（市民大学）や中等教育の教育者の方々と共に実践活動を行うようになりました。このように様々な人たちと対話を積み重ねるうちに、「人を幸せにする教育のあり方がここにある」と強く感じるようになり、次第に私の実践研究者としての軸が形作られていきました。

ドイツでの活動は、ケルン日本文化会館による多大なご支援があつてこそ実現できたものです。多くの皆様との協働の積み重ねが今回の受賞につながったことに、深い喜びを感じております。そして、どんな時も変わらず励ましを送り続けてくれた家族に、心から感謝しています。

気がつけばドイツでの滞在も22年となりました。このたびご縁に恵まれ、本年4月より岡山大学にて新たな一步を踏み出し、活動の拠点を日本へと移しております。これまでドイツ（ヨーロッパ）の日本語教育、継承日本語教育のフィールドで活動してきましたが、今後は日本の社会にも少しでも貢献できればと考えております。私にとっては人生で大きなチャレンジとなりますが、このたびの受賞を励みに、新たなフィールドで自分にできることを模索し、日本語教育、そしてその先にある一人ひとりが幸せに生きられる社会につながる活動を、全力で行っていきたいと思っています。皆様、今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。このたびは誠にありがとうございました。

2025 年度日本語教育学会 奨励賞 受賞コメント

内山 夕輝（公益財団法人浜松国際交流協会・主幹）

このたびは、奨励賞を賜り、身に余る光栄に存じます。受賞のご連絡をいただいた際には驚きのあまり、しばらく何も考えられませんでした。しかし、授賞理由に「官民学をつなぐ触媒としての役割」と記されているのを拝見し、まさに自分が目指してきた姿そのものであったことから、これまでの取り組みが報われたように感じ、感謝の気持ちでいっぱいになりました。



私のフィールドは地域にあります。ただし、私が尊敬してやまないボランティアのお歴々のような活動中心というわけではなく、日本語学習支援団体と行政の間に立ち、実践の最前線である現場と、企画決定を担う司令塔が対話できるよう、共通言語を見出して橋渡しをすることが主な役割です。突然降ってくる司令塔からの伝達（その多くは予算に絡むことですが…）をひっ迫する日本語教室にどのように伝えるか、また現場の課題を司令本部にいかにか自分事として受け止めてもらうか、日々頭を悩ませています。日本語教室では、日本語教師として学習者と向き合うだけでなく、学習者同士や家族間の調整など、異文化接触の場で生じる大小さまざまな摩擦に心をすり減らすことも少なくありません。

こうした地域日本語教育の現場で実践を積むうちに、その経験を一過性のものにせず、理論的な裏付けをもって社会に還元できればと考えるようになりました。そのためには、アカデミアとの接続が必要だと考え、大学院のリカレントコースで日本語教育に関する理論を深めることに努めました。実践先行型の私にとって、理論と実践知が合致した時には震えるほど感動したことを覚えています。自分の肌感覚を他者に伝えるために言葉を得たと、まさに腑に落ちた瞬間でした。

卒業後は、アカデミアの知見を借りて地域日本語教育の課題解決を図り、地域日本語教育の課題をアカデミアに投げ返して英知を集めるという往還を、自分にできる役割の一つだと意識して取り組んできました。この度の受賞は、そうした積み重ねを評価していただけたのだと思うと、素直に嬉しく存じます。ただ、私個人で成し遂げたことは一つもなく、先行事例の少ない中、常に新しいチャレンジに共に挑んでくれた同僚たちと、取り組みを支えてくださる関係者の皆様を代表していただいた賞だと受け止めています。

国際交流協会の職員である自分にとっては、まるで違う世界で夢を見ているようですが、推薦して下さった方々や選考委員の先生方のご期待に応えられるよう、これまでの取り組みをさらに発展させ、地域日本語教育への関心をより一層高めることに努めてまいります。特に、理論と実践をつなぐ役割を引き続き担いながら、全国の地域日本語教育現場に資する貢献ができれば、この上ない喜びです。

最後に、これまで要所要所で、自分には想像できない角度からの知見や様々な機会をくださった全ての先生方に深く御礼を申し上げます。また、私に現場を与えてくれた浜松市、日本語教育業務に理解を示してくれている職場、10 数年間ともに学んできた研修同期、そして愛情あふれる叱咤激励をしてくれる家族に、心より感謝いたします。ありがとうございました。

2025 年度日本語教育学会 奨励賞 受賞コメント

香月 裕介 (神戸学院大学・准教授)

このたびは、2025 年度日本語教育学会奨励賞をいただきまして、誠にありがとうございます。実は、つい最近まで、私は自分のことを日本語教育におけるいわゆる「ペーペー」とであると認識していました。それで、受賞のご連絡をいただいたときは、自分にはあまりに過分な話だと思い、すぐにお返事ができませんでした。熟慮の末に受諾のお返事をしてからも「ペーペーの自分が本当にもらっちゃっていいのか」としばらく悶々としていました。



ところが、受賞が公開されてから、研究や実践で一緒した方々から数々の温かいお言葉を頂戴したことで、これだけ多くの方と研究や実践を重ねて学びを得ておきながら「ペーペー」として自分が恩恵に与るばかりでは許されないと思い直しました。恩師からも「後進の指導やサポートを期待します」という激励をいただき、自分がすでに学びを次の世代につないでいく立場にあることを自覚しました。私にとって今回の受賞は、自分本位な性分を反省するきっかけとなりました。

私のこの自分本位な性分は、研究にも現れています。私はこれまで一貫して教師の研究を続けていて、先生方が自身の実践について語り振り返る場に立ち会い、その語りと省察を分析し、見えてきたことを形にしてきました。これは、もちろんその先生のことを理解するために行っていましたが、同時に私は、先生方の語りと省察の向こうに、いつも自分自身を見ていました。私は、教師研究を通して、自分がどうして日本語を教えるのか、自分がどうしたいのか、自分が何者なのかを理解しようとしてきたのです。授賞理由でご紹介いただいた単著にも、自身の経験と省察をこれでもかと書き込みました。これは、きわめて自分本位な研究のやり方だという自覚があります。でも、省察的实践を研究する以上、研究者自身の経験と省察は研究に盛り込むべき不可欠のものであるという強い考えがあって、そうしています。ただ、このように自分自身を研究に反映する私のスタイルは査読で「論文ではなくエッセイ」と評されたこともあり、本当にこれでいいのかという迷いが自分の中にずっと燻っていました。

ですが、このたび賞をいただけたことで、自分本位な私の研究スタイルが「まあ、こういうのもいいんじゃないの」と認めてもらえたのだと（都合よく）解釈しています。私にとって今回の受賞は、自分の研究者としてのあり方に自信を与えてくれるきっかけとなりました。

そういうわけで、今の私は、自分本位ではいけないと思いつつ、自分本位であり続けようとも思っています。これはつまり、「誰かのために」と「自分のために」両方を見据えて研究と実践を続けていくということです。こう書くとあまりに単純かつ当然のことであり、立派なことを何一つ言えない自分が恥ずかしいのですが、今後の意気込みとして、偽りのない正直な気持ちです。

最後になりましたが、日頃より研究と実践を支えてくださる学会の皆様、改めて御礼申し上げます。皆様のために、そして自分自身のために、より一層精進してまいります。

2025 年度日本語教育学会 奨励賞 受賞コメント

吉川 達 (立命館大学・准教授)

この度は、奨励賞という栄えある賞をいただき、誠にありがとうございます。受賞のご連絡をいただいたときは、「まさか自分が？」と、信じられない気持ちでした。甚だ僭越だとは思いましたが、期待を込めてどなたかがご推薦くださり、委員会の方々のご承認くださった結果だと思しますので、謹んで賜りたいと思います。

近年私は、多読を中心に理解可能な多量のインプットが日本語学習者の日本語習得を助けるのではないかという立場で、実践・研究を行っています。そもそも多読を始めたきっかけは、読解教育における挫折がありました。以前私はマレーシアの予備教育機関で日本語教育に携わっていたのですが、その際に行っていた精読やテスト対策の読解授業がうまくいかず、学習者の将来を左右する大切な試験で十分な結果を残すことができませんでした。それまでも、この方法で学習者の読解能力は伸びるのか、学習者に無理難題を強いているのではないかと疑問を抱くことがあったのですが、この挫折を機に一度立ち止まり、他に読解教育の方法がないかと探して出会ったのが、今回の受賞理由にもあった多読でした。

私が多読を始めたころは、NPO 多言語多読が日本語教育における多読の読み物を出版しており、容易に実践が始められる環境にありました。実践例は蓄積されつつあったのですが、英語教育に比べ十分にその効果が実証的に証明されている段階にはありませんでした。実践するからには、その効果も実証的に明らかにしたいと思っていたところに、多読に関連する課題が科研費に採択されたことは、幸運でした。そこから本格的に多読の実践環境のさらなる充実と効果の実証的な研究を進めることになりました。現在もまだ十分に成果が出ているとは言えない状況ですが、先達の蓄積のもと、先輩方のご協力や研究者仲間との共働によって多読の読み物作成、実践、研究を進められ、さらにそれが今回の受賞の一因になったことは望外の喜びです。

現在の私の所属は立命館大学の情報理工学部です。専門は日本語教育学なのですが、本学の日本語教員は学部には所属し、私は「たまたま」情報理工学部には所属することになりました。たまたま入った情報理工学部ですが、周りは情報理工学を専門とする教員ばかりで、その分野の情報が自然と耳に入ります。もともと ICT を利用した教育にも興味があり、メタバースや生成 AI など時代の流れもあったので、それを日本語教育に取り入れることにも挑戦するようになりました。まだまだ実験的、挑戦的な取り組みではありますが、ICT を使えば、例えば日本語の本が全く手に入らない環境の学習者に多読環境を提供するようなことも可能です。日本語を学びたいと思った人が、場所や状況の制約を超えて学習する機会が持てるよう、ICT を用いた学習方法を今後も追究したいと考えています。

受賞理由には、近著や「現職日本語教師研修プログラム普及事業日本語教師【中堅】に対する研修」のことも挙げていただきました。これらは機会を与えていただいたからこそ、執筆、参画できたものです。貴重な機会を与えてくださった方々にも、この場をお借りして改めてお礼申し上げます。



2025 年度日本語教育学会 功労賞 受賞コメント

畑佐 由紀子 (広島大学・名誉教授)

ご連絡をいただいたときは、私でいいのかと思いました。でも、このような名誉ある賞をいただけるのは皆様のご支援のおかげだと思ひ、お受けすることにしました。

1980 年代、北米では Krashen の理論、インプット、インターアクション、意味交渉、タスクなど指導に関連する研究が進められていました。当時私はイリノイ大学で英語教育を専攻していたので、技能の教え方、カリキュラム開発、評価などの実践的な科目はもとより、言語習得理論や認知心理学、社会文化論など理論的な側面についても学びました。授業観察では色々な語学の授業を見に行きましたが、どの授業も創造的で目を見張るものでした。



大学でティーチングアシスタント (TA) として日本語を教え始めたのはこの頃でした。文法説明と句型練習を主とする日本語の授業に限界を感じ、自作の教材を使って授業を試みましたが、自分の力不足を痛感するだけでした。そのため、修士取得後は言語学の博士課程に進み、学外での実践の機会を増やし、他校の先生に自分の授業を見てコメントをいただきしました。その後、博論を書きながら教科書の執筆や TA 指導を任されるようになりました。

学位取得後はパデュー大学とアイオワ大学で働きました。パデュー大学の日本語プログラムは始まったばかりで、カリキュラム開発は比較的容易でした。一方、アイオワ大学は学部の日本語の履修者が半減し、大学院は募集停止に追い込まれるという危機的状況でした。

そこで、大学院のカリキュラム改変を行い、新たに教員を採用し院生のリクルーティングを積極的に行いました。彼らが即戦力として日本語教師の職に就けるように、TA として雇用し細かい指導のもと実務経験を積んでももらいました。学部では、ニーズ分析からカリキュラム開発をやり直しました。プレースメントテスト、到達度評価、プログラム評価システムを構築し、コースデザイン、TA 指導やスタッフ間の連携の見直しなどを数年かけて行い、その後履修者のフィードバックや評価データをもとに授業改善に取り組んでももらいました。講師や TA に大きな負担をかけましたが、皆のおかげでプログラムの立て直しことができました。

アイオワ大学には各外国語学部に言語教育の専門家がいて、学部の枠を超えて共同で院生指導をしたり勉強会をしたりしていたので、彼らとの交流から多くのことを学びました。特に、教育の質を向上させるには、理論と実践の関係性を把握し連結すること、実践や理論的主張の検証は厳格な研究によって行う必要があることなどは、私の研究を支える柱となりました。

2007 年からは広島大学で教員養成関連の授業や研究指導を担当しました。仕事は充実していましたが、教員や研究者の育成には課題も感じました。指導技術の獲得には時間がかかるため、大学の講義や実習だけでなく、学外の教育機関と連携して適切なフィードバックを受けながら実践を積み重ねていく必要があると思います。また、研究に必要な基礎科目を充実させ、実践報告だけではなく厳密な研究方法を用いた検証研究を加えること、他分野からの知見を取り入れた学際的研究を支援することも重要だと思います。

2025 年度日本語教育学会 論文賞 受賞コメント

橋本 ゆかり（横浜国立大学・教授）・鈴木 朋子（同）

この度は『日本語教育』論文賞という栄誉ある賞を賜り、心より御礼申し上げます。ご講評を拝読し、拙稿を完成させるべく探究と思索を重ねてきた歩みに光を当てていただいたことを知り、大きな喜びを感じております。何よりも、微力ながら、外国につながる子どもの教科学習に関わる課題に寄与できましたことに、特別な想いを抱いております。



学校現場を訪問すると、教員、支援の方々から、「日本語の問題なのか、学力の問題なのか、あるいは発達障害によるものなのか判別が難しく、支援に戸惑っている」という声をよく耳にします。本研究は、こうした現場の実態に触れたこと、そして学校側から「専門的立場からの知見がほしい」という切実な要望をいただいたことがきっかけとなっております。

しかしながら、この問題に深く切り込むにはいくつかの壁がありました。日本語教育と心理学という、両分野を横断しなければ解決が難しい課題だったからです。両分野を往還する形で研究・分析を進めましたが、既存の心理検査については、先行研究において複数の問題が指摘されていたため、それらを本研究でどう扱い、どう配慮すべきかという点に腐心しました。特に両分野における視点の違いや検査間の項目・用語の重複をどう整理し、編み直していくのが大きな課題でした。加えて、学力、日本語能力、認知機能、性格といった関係性について、理論を援用しながら、どう関連付けてアセスメントとの対応を示しつつ精緻化した論考にまとめ上げていくのかについて、模索と思考錯誤を繰り返しました。

研究成果としては、グレーゾーンにいる子どもの能力の見極めと支援方法について多くの示唆を得ることができました。特に重要だと確信したのは、多角的側面から子どもを捉えることです。今後は、日本語能力、認知能力だけではなく、個人の認知方略や母国での行動規範、性格、表層では捉えられない心理的側面なども含めた包括的支援モデルを提案していきたいと考えています。また、本研究を通して、支援の方向性が見えることが教員や支援者の自信につながるという肯定的な影響も確認できました。一方で、具体的な支援策を現場で実施できる体制の不足など、新たな課題も見出されました。科学の発達により検査方法もさらに洗練されていく中で、それらを運用することも考えています。外国につながる子どもたちが、その能力を存分に発揮し、豊かな人生を送れるよう、引き続き力を尽くして参る所存です。

最後になりますが、本研究は、さまざまな方々のお力添えより成り立っております。協力児と保護者、小学校長、養護教諭・特別支援コーディネーター、在籍級担任教員、国際教室担当教員の先生方からご協力を賜りました。そして丁寧な査読をしてくださいました先生方、2024年度日本語教育学会春季大会においてご質問やご意見をくださいました皆さまにも、この場をお借りしてあらためて御礼申し上げます。

2025 年度日本語教育学会 学会活動貢献賞 受賞コメント

谷部 弘子（東京学芸大学・名誉教授）

このたび、別掲の方々とともに2025年度の「学会活動貢献賞」をいただきました。表彰を受けました13名を代表して、心より御礼申し上げます。私自身は、「貢献」と言えるほどのことが何かできたのかと問われればたいへん心許ないのですが、同時受賞の多くの方とは委員会や理事会で活動をともにしており、ご一緒にこのような賞をいただけたことを本当にうれしく思っております。

私は20代の後半に中国帰国者の方と接点を持ったことをきっかけに、大学時代の専攻とは異なる日本語教育の道を志しました。その勉学のスタートとなったのが、日本語教育学会が国際交流基金の助成を受けて1979年に実施した「日本語教育研修会」です。仕事の関係で、夕方からの研修会にたびたび遅刻しては講師の先生方の響きをかかっていた劣等生でした。それでもなんとか修了できたことが実習課程の受講やその後の中国大学日本語教師研修の場への赴任につながりました。そこには『日本語教育』のバックナンバーも配架されていたので、3年間の赴任中ずいぶんと利用させてもらいました。学会には入会前から多大な恩恵を受けていたわけです。

学会に入会したのは、帰国後大学院に進学してからであったと記憶しています。何年かの非常勤生活を経て、大学に職を得、本務校での留学生教育や教師養成に自分なりのペースができてきた頃だったのでしょうか。教師研修委員会の委員にとお声かけいただきました。「研修会」の劣等生であった私が、20年の時を経て、同じ学会の教師研修のコーディネーターやアドバイザー的な役割を務めることになるとは思いませんでした。しかし、何事も継続し前に進むということはこのような循環のシステムがあるからこそであり、その循環の中に身を置くことができたのは幸いでした。何より委員会での教師研修をめぐる議論は刺激的でした。この教師研修委員会を皮切りに試験分析・大会・表彰といくつかの委員会活動に携わるようになりました。また、ちょうど日本語教育推進法が制定された年2019年からは理事として学会運営に関わる機会もいただき、一委員として関わっていた頃とはまた異なる視点で学会と向き合うことになりました。特に執行部として携わった2年間は、学術研究団体・公益社団法人として掲げた理念を念頭におよそ3,500名の会員を擁する組織を健全に持続的に運営していくことの困難、政策や社会の変化に対し適切に迅速に学会の総意として発信することの重要性、責任の重さを痛感しました。この点では、一つ一つ形にしていっていった充実感とともに力不足であったことの心残りがあります。

所属機関・専門分野を超えた会員の方々との出会い、学会活動をともにすることで、さまざまな知見に触れ、日本語教育の視野を広げることができました。今振り返って、私にとっては「貢献」というよりまさに学びの場、成長の場であったと断言できます。最後に、活動をご一緒させていただいた皆さま、いつもサポートしてくださった事務局の皆さまにもあらためて感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。ありがとうございました。

